

意識、自己、実体

星 野 徹*

人格の同一性の問題を本格的に考察したのはロックが初めてであると言われている。ロック主義とそれを改定した新ロック主義は、現在でも大きな影響力を持っているものの、それに対する反論も数多く提出されている。本稿では、人格の同一性に関する代表的な説のうちのいくつかを検討することにする。新たな説を提案することはできないが、それぞれの説が抱える問題点を摘出することならばできるだろう¹。

I 意識の同一性と人格の同一性

ロックが動物種としての人(man)と、理性と自己意識を持ち、賞賛や懲罰の対象となる人格(person)を区別したことはよく知られている(Locke, 1975, Book II, Chap. XXVII)。

私は一つの人であるとともに一つの人格でもある。おそらく私の場合、T.Hと名付けられたものが誕生して以来、現在に至るまで、同一の人が存続し続け、同一の人格が存続しているのだろう。しかし、人間の平均寿命が10,000年であるような世界があるかもしれない。そのような世界では、10,000歳の人の心には10歳時の痕跡は何もないかもしれない。10歳時の記憶は跡形もなく消えているし、10歳の時とは性格や好みもすっかり変わってしまったかもしれない。そのようなとき、9,990年前に10歳であった人物と現在10,000歳である人物は、ロックによれば、人としては同一であるが、別人格なのである。また、多重人格の場合もやはり、一つの人に複数の人格が宿

るということになるのだろう。一方、ソクラテスと類似の心的性質を持ち、ソクラテスの行為を自らの行為として記憶している人が出現したとするならば、その人は、ギリシャ時代にソクラテスと呼ばれた人とは別人ではあるが、ソクラテスの人格そのものが、21世紀に、新たな身体の中によみがえったのである。

一つの人に複数の人格が宿ったり、一つの人格が複数の人によって実現されたりすることがありうるのは、人と人格の同一性の条件が異なるからである。

石ころや土の塊ならば、それらを構成する部分のごくわずかでも欠けたり、あるいはそれらにわずかでも何か加わったりすれば、それらは元の石ころや土の塊とはべつのものである。おそらく現在の世界には、10年前の世界にあった石ころや土の塊はもう存在していないだろう。

部屋の前にある樺の木や駐車場をうろついているのら猫は、石ころや土の塊とは異なったあり方をしている。目の前の樺は、10年前に同じ場所に生えていた樺とはずいぶん違っている。枝は伸び広がり、幹も大分太くなっている。目には見えないけれど、樺を構成している原子もかなり入れ替わっているのだろう。それにもかかわらず、目の前の樺は、10年前にここに生えていた樺とまぎれもなく同じものである。最近駐車場付近でよく見かけるのら猫は、一年前に同じ場所にいた、似たような猫にくらべれば、毛は生え替わっているだろうし、体重も増えていることだろう。しかし、たぶん、あれは一年前の猫と同じ猫である。樺や猫が部分を失っても同一のままであり続けるのは、同一の生命が

* ほしの・とおる

埼玉大学教養学部教授 哲学

存在し続けているからである。同一の生命が持続している限り、植物や動物は、たとえすべての構成要素が入れ替わっても、同一のままであることができるのである²。実際、今の私の身体の中に、生まれた時の私の身体を構成していた原子はいくつ残っているのだろうか。

人格は、石ころとも、また、樗とも異なったあり方をしている。人格の同一性は構成要素の同一性に依存しない。一つの人格が存在し続けるということは、一つの生命が持続しているということでもない。人格の同一性とは、ロックによれば、意識の同一性である。

しかし、意識が時間を通じて同一であるとは、意識が同一の主体の意識であり続けるということではない。それならば、人格の同一性とは主体の同一性であるということになってしまうだろう。また、それは、同じ種類の知覚体験や想起体験が生じ続けるということでもない。たとえば、四六時中同程度の頭痛がし続けていることが、意識の通時的同一性の条件であるわけではない。意識の同一性が意識内容の質的同一性に依存するとすれば、同一の人格が長い時間にわたって存在することは実質的に不可能になってしまうだろう。

われわれは誰でも過去の体験を思い出すことができる。過去の体験を思い出すとは、過去の意識内容を思い出すことであり、こうして思い出された過去の意識内容は現在の意識と同一の意識に属する。時を隔てた意識状態が同一であるとは、それらが記憶によって連結されているということなのである。

人間の意識は脳と密接に関係していることだろう。意識の在り方は脳の状態によって決定されているのかもしれない。あるいは、脳とは独立に、デカルト的な心的実体、または魂のようなものが存在しており、意識はその様態(mode)なのかもしれない。脳は、樗や猫のように、部

分が入れ替わっても、特定の機能が維持されていけば同一の脳であり続けることができる。また、心的実体が存在するとすれば、それにはまた独自の同一性の条件があるのかもしれない。しかし、意識は、そして人格は、意識を支える脳や心的実体が数的に異なった脳や心的実体と交代しても同じであり続けることができる。先立つ脳や心的実体によって実現された意識状態を、後続の脳や心的実体が引き継いでいけばよいのである。かくして、今の私の脳は、私が生まれたときの脳とは別のものであるかもしれないし、また、私に魂があるとすれば、今の私の魂は、いつか、私の気づかぬ間に、新たな魂に入れ替わってしまうかもしれないのである。

人格の同一性に関するこうしたロックの見解は、それほど常軌を逸したものではない。われわれは、過去の体験や行為を思い出すとき、それを自らの体験や行為として思い出すのであり、過去においてこの私が存在していたとすれば、それは私が今思い出しているところの体験をした人物であり、今思い出しているところの行為を行った人物であるほかはない、と誰もが確信している。私は、中学生のころ、野球大会の一回戦の第三打席でデッドボールを受けたことを記憶している。その場面を思い出しながら、私はあのときバッターボックスに立っていた人物ではなく、実はボールをぶつけてしまったほうの人物だったのだ、などと考えることはふつうはない。また、脳を含めた人体を構成する原子が刻々と入れ替わっても同一の自己が存在し続けるということは、多くの人が暗黙のうちに受け入れていることだろう。さらに、心臓が人工心臓にとって代わられても同じ機能が維持されるように、脳が人工の脳に入れ替わったとしても、同一の意識が持続し続け、同一の自己が存在し続けることは可能であるということも、多くの哲学者が受け入れていることである。

三十数年前の身体と今の私の身体には、共通の構成要素はほとんどないかもしれない。また、この世界が二元論的世界だとするなら、当時の人物の魂と今のこの私の魂も、入れ替わっているのかもしれない。それにもかかわらず、この私が三十数年前にデッドボールを受けたのである、と私が信じているとすれば、それではいったい私は自己とは何であると考えていることになるのだろうか。

人格の同一性が意識の同一性に他ならないとするなら、自己とは意識のことなのだろうか。そうではないだろう。同一性の問題について考え、中学生の頃のことを思い出している私とは、思考や想起そのものではなく、やはり、思考や想起の主体(subject)であろう。私が思考や想起の主体ならば、思考や想起は主体としての私のありかた、あるいは、私の様態ということになるだろう。そして、さまざまな心的状態をその様態として持つところの主体とは、結局のところ、実体以外の何ものでもないだろう。しかし、ロックは、意識を支える実体が入れ替わっても同一の人格が存続することは可能であると言う。これはどういうことなのだろうか。そもそも、複数の実体が、数的に同一の意識を交互に支えるなどということが本当にありうるものだろうか。

デイントンは、意識の流れの同一性のみに基づけられた自己の同一性の理論を提案している。デイントンによれば、自己とは同一の意識を産出する実体なのである(Dainton, 2005)。デイントンの説を検討することによって、ロック説の抱える問題点が鮮明となってくるだろう。

意識という語は多義的である。私は、時計の秒針の音にふと気が付くことがある。そのとき、私は秒針の音を意識したのである。同じように私は、サイレンの音に気づき、夕焼けに気づき、頭痛に気づく。サイレンの音を意識し、夕焼け

を意識し、頭痛を意識したのである。ある意味において、意識することは気づくことと同じである。しかし、私は目覚めてさえいれば常に何かに気づくというわけではない。何にも心向けず、ただぼんやりと時を過ごすこともよくあることである。そのようなとき、私は、何にも意識を向けてはいないが、だからといって、私は意識を失ってしまったわけではない。意識を失っていないからこそ、突然雷鳴が響けば、私はそれに気が付くことができるのである。深い眠りと覚醒状態がどのように違うかということは誰でも知っている。デイントンが意識と言うとき、彼がその語によって意味するのは、目覚めた瞬間に誰もが否応なく入り込むことになるあの独特の心的状態のことである。

こうした広い意味における意識は、一つの流れを形成しているとデイントンは考える。私は、目を開いていれば、特に何かに注意を向けることをしなくとも、常に、視覚特有の体験をしている。同じように、耳をふさいでさえいなければ、聴覚に特有の体験をしている。私の一日はこのような体験で隙間なく満たされており、また、私の一日がこのように満たされているという感覚も持っている。意識は持続していると同時に意識の持続を私は感じている。意識は流れていると同時に、意識が流れていることを私は意識しているのである。

ところで、一つの意識の流れは、一つのものによって産出されるとは限らない。一つの意識が複数の脳に引き継がれることによって持続することもあるかもしれないし、複数の魂によって、また、時によっては脳から魂へ、また魂から脳へと引き継がれるかもしれない。このように、一つの意識が複数の実体によって生み出されるとしても、ロックと同様、デイントンにとっても、一つの人格が存在し続けているのである。しかし、自己は意識そのものなのではない。

自己とは意識を生みだすもの、意識の産出者である。したがって、意識が、あるときは脳によって、ついで人工脳によって、最後に魂によって実現されるとすれば、自己は、最初は脳であり、次には人工脳であり、最後には魂となるのであるが、それらが産出する意識が継続している限り、それらは同一の自己なのである。脳や魂のような意識を産出する実体を、デイントンは、現象的実体(phenomenal substance)と呼ぶ。自己とは、同一の意識を産出する現象的実体なのである。

しかし、デイントンの説を丸ごと受け入れるのは難しい。一つの意識が時刻 t_1 においては脳によって、 t_2 においては人工脳によって、 t_3 においては魂によって産出されているとしよう。自己は意識の産出者なのであるから、 t_1 において「私」と発話すれば、それは脳を指すことになるだろう。同様に、 t_2 における「私」は人工脳を、 t_3 における「私」は魂を、それぞれ指すことになるはずである。このように、その時々によって「私」の指示対象が異なるにもかかわらず同一の自己が存続しているとは、とても奇妙なことである。

意識の産出者が入れ替わっても数的に同一の自己が存在し続けることができるのであれば、この世界はデカルト的世界でなければならぬだろう。デカルト的世界における私は心的実体である。心的実体は脳と相互作用することもあれば、人工脳と相互作用することもあるだろう。しかし、同一の心的実体が存在している限り私も存在するだろう。そして、脳と人工脳が心的実体に生み出す意識内容が質的に類似している限り、ロック的な人格も存在し続けることだろう。

しかし、自己が実体であるというのは本当のことだろうか。

II 意識の流れと実体

ヒュームが実体としての自己の存在を否定したこともまたよく知られている。実際、いくら自分の内側を覗きこもうとしても、見出されるのは、ヒュームの言うように、刻々と移り変わる感覚印象だけであり、変転する感覚印象を支え続けている不変の自己のようなものを発見することは決してできないだろう。

しかしながら、ここで、痛みの世界地図をつくることを考えてみよう。ある時刻に、痛みが発生している箇所を地図の上に印して行くのである。例えば、オバマが頭が痛ければ、オバマの頭がある場所に印をつけ、ダルビッシュに右肩痛が発生していればダルビッシュの右肩のある場所に印をつけるのである。こうして、ある時刻の痛みの位置を確定し、さらに、それぞれの痛みの質と強度をそれに加えれば、痛みの地図は完成するだろうか。痛みの位置と強度と質の配置が同じ二つの世界は、痛みに関して区別のつかない世界だろうか。

そうではないだろう。たとえば、ある時刻に、ある地域では100か所で痛みが発生しているとしよう。別の時刻にもやはりまったく同じ場所で痛みが発生したとしても、二つの状況の間に痛みの発生状況に関して違いがあるということはありうることである。最初は、100人の人間がそれぞれ一か所ずつ痛みを感じていたのに対して、次には、50人の人間が二か所ずつ痛みを感じていたのかもしれないからである。また、痛みを感じている人数には違いがない場合でも、最初の100人と後の100人はまったくの別人かもしれないからである。痛みの地図を完成させるためには、それぞれの痛みがどの主体に帰属するかということも書き加える必要があるのである。

ここで痛みのある場所と言われているのは、あく

まで痛みの原因となった出来事が生じた場所であって、痛みの体験そのものは空間的な位置を占めることはない、と言う人がいるかもしれない。それならば、痛みの地図のかわりに視点の地図というものを考えてみればよい。地図に世界を見るものの視点を書き込むのである。視点地図の場合は、さらに、闇夜をホテルが照らすように、それぞれの視線が照らし出す範囲を確定しなければならないが、それで視点の地図ができあがるというわけではやはりない。それぞれの視点がどの主体のものかという情報が、まだ欠けているからである。世界には一つ目や四つ目の生物がいるかもしれない。また、一つの視点を複数の主体が共有するということもあるかもしれない。二つの接眼レンズを持った望遠鏡を二人で覗く場合がそれに当たるだろう。

自己は知覚の束であるというヒュームの見解は誤りである。知覚体験は常に誰かの体験である。すべての生物が一種類の知覚器官しか持たないような世界においても、誰のものでもないような知覚体験などはない。知覚体験には体験の主体があるということであり、自己は体験を支える実体であるということである。

しかし、ヒュームの言うように、恒常不変の自己のようなものを直接知覚することができないことも確かなことである。また、他方で、意識が流れているという実感を多くの人が持っているということも事実である。ヒュームも例外ではない。ヒュームは、心とはいくつもの知覚が次々に現れ、通り過ぎて行く一種の劇場であると言う。さらに、ヒュームによれば、劇場の比喩でさえ適切ではない。数々の場面が演じられる心の場所の概念や、心の場所を構成する材料の概念をわれわれは持っているわけではないからである。実際に生じているのは継起する知覚だけなのである。そして、継起する一連の知覚が存在するとは、刻々と内容を変えゆ

く意識の流れがあるということに他ならないだろう。

一つの意識が流れて行く。私は今その流れの最先端にいる。この流れが永遠に途絶えるときが私の死の時である。多くの人が抱いているであろうこうした考えは、しかし、私にはひとつの根深い誤解であるように思われる。

私にはメロディーが流れて行くように感じられる。また、電車が遠ざかるのを見、歯痛が退いて行くのを感じる。しかし、それに加えて、さらに、意識が連綿と続き、流れて行く様を私は感じるができない。私には意識の流れの意識がないのである。

W. ジェイムズによれば、すべての意識は絶えまなく内容を変化させながら、途中で分岐したり混線したりすることなく、連続して進んで行く(James, 1950, Chap. IX)。睡眠とは意識の流れの中絶ではあるが、たとえば、二人の人間、ポールとピーターが同じベッドで目を覚ましたとき、それぞれの意識は、中断されていた意識の一方とのみ結合し、再び流れ出す。目覚めた後のポールの意識は眠る前のポールの意識を、目覚めた後のピーターの意識は眠る前のピーターの意識を探し出し、再会するのである。

しかし、私には、意識の連続的存在や連続的変容の感覚だけではなく、眠りによる意識の流れの中断の感覚というものもない。私が昨夜8時間ほど眠っていた、ということは確かであると思うのであるが、それに伴う、暗黒部分の感覚もなければ、入眠前と覚醒時の意識の断絶の感覚もない。眠りから覚めたときに、意識が寝入る前の意識と再び出会ったという実感も抱いたことはない。だから、私の意識が、生まれてこのかた、何千回何万回となく中断したのだとしても、それに対応するいわゆる現象的事実なるものを私は持ち合わせてはいない。私の意識は実は一度も中断したことはないのだ、と誰か

に言われたとしても、それを反証するような事実を私の意識の中に見出すことは私にはできないだろう。

では、意識が連続している、あるいは、意識が流れているとはどのようなことなのだろうか。

私は朝から歯が痛い。歯の痛みが連続して生じているのである。また、先程から飛行機が飛行機雲をつくりながら飛んでいるのが見えている。飛行機が連続して見えているのである。このように、感覚の内容や知覚の対象ならば、連続的に現われることはよくあることである。しかし、今の私の視覚体験と、朝の視覚体験が連続しているとはどのようなことなのだろうか。朝の視覚体験の後には別の視覚体験が続き、その後にはまた別の体験が続き、最後に今の視覚体験に到達する、ということなのだろうか。では、どうして私の視覚体験とマラドーナの今朝の視覚体験が連続していると言ってはいけないのだろうか。

また、今見えているあの飛行機と、先程見えていた飛行機は同じものだろうか、という問いや、今の痛みと先程の痛みは同じ痛みだろうか、という問いになれば答えようがある。前者は、見えている対象の数的同一性についての問いであり、後者は、痛みの原因となる出来事の同一性についての問いか、痛みの質や強さについての問いであるからである。しかし、この視覚体験、あるいは、視覚に関する意識と、ある人間の朝の時点における視覚体験、あるいは、視覚に関する意識が同じか否か、という問いには答えようがない。意識は、飛行機のような物でもなければ、痛みのような心的性質でもないからである。

さらに、たとえば、飛行機の位置や奥歯の痛みの変遷を現在から過去へと遡ってたどることはできるし、マラドーナの視覚体験やラトルの聴覚体験を現在から遡ってたどることも、原理

的にはできるだろう。しかし、この視覚体験の先行状態を探ることは、それが T. H と呼ばれる人間の視覚体験の跡をたどることではないとすれば、不可能である。これが先程はどのようなであったかと問うことは、先程この私に何が見えていたのかと問うことでしかないだろう。そうではないとすれば、やはり、私にはこの問いに答えるすべがない。

意識が流れているとは、結局のところ、同一の主体が存在し続けており、かつ、どの時点をとってもその主体には意識がある、ということである。私が朝からずっと存在しているならば、私の視覚体験も朝から今まで連続しているし、歯痛も途切れることなく継続していることになるだろう。今の視覚体験と、T. H の朝の視覚体験も、同一の主体の体験であるという意味において、同一であると言うことができるだろう。

再び、主体が描かれていない視点地図を考えよう。一定時間——たとえば30分間——にわたってこのような視点地図を描き続けたとすれば、いくつかの視点は、ホテルの飛跡のように連続的な線を描くことだろう。そうした連続的な軌跡を描く視点の一つを取り出すとすれば、その視点によって照らし出された一連の視覚風景が得られるだろう。それでは、そうした一連の風景に対応し、それを連続的に知覚する一つの意識の流れがあると言うことができるだろうか。15分経過したところで、視覚の主体が、同じ視覚機能を持つ別の主体と交代したとすれば、それでも、一つの意識の流れが継続していると言うべきだろうか。視点の移動に伴う視覚風景の変遷がスクリーンに映し出されるならば、そのスクリーンには、30分間にわたって、途切れることなく映し出される一つの風景が見えることだろう。しかし、世界では、このような質的に連続した視覚を二つの主体が踵を接して体験している。最初の主体にとっては、

視覚体験は最初の15分で消えてしまうのである。それならば、ここには、一つの意識ではなく、時間的に接続する二つの意識があるのである。

質的に同一の意識内容が複数の主体に連続的に属するということはありうることである。また、質的に同一の意識内容が同時に複数の主体に属するということもありうることだろう。そうしたときに、数的に別個の意識が存在すると言うべきであるのならば、質的に同一の意識を数的に個別化するものは、実体としての自己の存在以外にはありえないだろう。一つの意識というものが存在するとすれば、意識を支える一つの自己が存在し続けているからに他ならないだろう。時刻 t_1 における意識と t_2 における意識が同一の意識を形成するのは、それが質的に類似しているからではなく、同一の主体に属するからなのである。

同一の主体が存在するならば、同一の意識が存在する。主体が連続的に存在するならば、意識も持続する。意識は、主体の持続に依存する形で持続する。こうした意味でならば、意識が持続的に存在し、意識が流れて行く、という言い方は許容されるだろう。しかし、それは、誤解を誘発するおそれのある言い方である。雲が流れ、猫が生き続け、机が持続的に存在する場合と同じ仕方で、意識も存在すると思われるからである。

意識や思考は刻々と内容を変える。変化が生じるためには、変化の前後を通じて何かが同一のままとどまるのでなければならぬだろう。壁が変色するならば、変色する壁は同一の壁でなければならぬ。昨日の居間の壁の色と今日の仕事部屋の壁の色が違って、壁の色が変化したとは言わないだろう。猫の体重が増えたならば、体重の増加の前後を通じて同一の猫が存在し続けていなければならぬし、気温が上昇

するならば、それは同じ場所の温度が上がるのでなければならぬ。世界が平和になるならば、それは同一の世界が戦争状態から平穏な状態へ移行するのである。では、意識内容が刻々移り変わるとき、何が同じままにとどまるのだろうか。ここで、ヒュームが否定した、意識に特有の舞台のようなものを想定したくなるかもしれない。意識の内容がすっかり変わってしまっても、意識が演じられる舞台は同一のままなのである、というように。しかし、意識の変化に舞台は不要である。

ある哲学者が、心身二元論から唯物論へと宗旨替えをしたとしよう。彼の思考の内容が変化したのである。思考の内容が変化したと言っても、変化を通じて同一の思考が流れていたわけではないだろうし、不動の思考の舞台があったわけでもないだろう。ただ単に、同じ人間が、ある時点では二元論を信じ、後の時点では唯物論を信じているというだけである。私は今朝、日の出を見、今夕焼けを眺めている。私の視覚内容が変わったのである。この場合は、同一の視覚体験が存続しているうちに内容を変えた、という言い方は許容されるかもしれないが、それは、朝から夕方にかけて同一の意識のスクリーンが存在し続けているという意味ではない。内実は、朝と夕で同じ私が違うものを見ているということである。だから、意識の流れと言っても、意識が金太郎飴のような形をしていて、切り口に、ある時刻における意識の内容が現れる、というわけではない。人や机が時間を通じて存在するありさまを描きだすのに、金太郎飴モデルはあるいは有効かもしれないが、意識については誤解を助長するだけである。

それでは、意識の流れの神話を捨て去ったならば、人格の通時的な同一性についてどのような光景が見えてくるだろうか。

Ⅲ 実体の同一性と人格の同一性

人格の同一性とは実体の同一性であると主張する哲学者の多くは、同じ人格であるとは、語の厳密な意味において同じであるということであり、私が過去や未来のある人物と同じであるか否かという問いには確定的な解答がなければならぬ、と信じている。部品を交換した後の車が、交換前の車と同じ車と言えるかどうかは、「同じ」という語をどのように解釈するかによるのかもしれない。修理の前後では、車を構成する部分が入れ替わっているので厳密には同じではないけれど、交換された部分がわずかであり、性能も変わっていないので、緩やかな意味では同じであるとみなしてよい、と多くの人は考えるかもしれない。しかし、10年後の世界のある人物が私と同一であるとするなら、それは、「同一」という語のいかなる意味においてもそうなのである。10年後の世界に、今の私と80%同じである人間が存在する、などということはありえない。その世界には、私がいるかいないか、二つに一つなのである。

確かに、今ここで、私が10年後の世界のあり様を完全に知ることができたとしても、その世界のある人間が未来の私であるかどうかまでは知ることができないかもしれない。しかし、その時になってみればわかるだろう。その時になってみても、今の自分が10年前のあの人物と同じかどうかは定かではなかったり、あるいは、今の私はあの人物の自己の80%を受け継いでいる、と考えたりするということがありえないことのように思われる。ところで、10年後の世界にこの私が存在するとしても、10年もたてば今の私の身体を構成している原子の多くは地球の様々なところに散逸してしまっていることだろう。また、10年後の私は、今の私と異なった知覚体験を持っていることだろうし、

性格も変わっていることだろう。それにもかかわらず、私が10年後のその人物と厳密に同じであるとするなら、自己とは他の何かによって構成される複合体(complex)ではなく、部分を持たず、したがって分割することができない単体(simple)でなければならないことになるだろう。知覚や記憶は単体の様態であり、性格は単体の傾向性である。そして、単体が存続し続ける限り自己も存続し続けるのである。こうして、自己とは実体であり、人格の通時的同一性は厳密な意味における同一性でなければならない、と考える人々は、自己は単体であるという見解を受け入れることになるのである³。自己が単体であるとすれば、人格の同一性は、記憶の継続性や身体の時空連続性のような他の何ものかに還元されることのない、この世界についての端的な事実であることになるだろう。

しかし、自分と、過去、あるいは未来の人間が同一であるか否かは、他人にはわからないかもしれないが当人にはわかる、という、人格の同一性判断に関する一人称的特権は疑ってかかる必要がある。たとえば、20年前の世界に存在する人物全員の意識状態についての完全な情報が私に与えられたとすれば、その中のどれが私であるか、私に判断できるだろうか。それぞれの人間が、そのとき、どのような知覚体験をし、どのような心理状態にあり、どのような思考が頭をよぎっているか、等々を知ったところで、私にはその中のどれが私なのか判断が付くとは思えない。私が、それぞれの人と同一化し、意識状態を内側から体験することができたとしても、たまたまその人が鏡を覗いているのでもない限り、その人物が私自身であるか否かを確信を持って言うことはできないのではないかと私は思う。しかし、その人の生年月日、名前、職業などを知らされれば、私はそれが私であるかどうか、即座に知ることができるだろう。自

分自身の同一性判断に関してさえ、意識内容についての情報は副次的であり、決定的に重要なものは、その人の社会的な性質であるように思われる。ただし、自己同一性の判断基準となることと、自己同一性そのものの基準となることは別のことである。人物の社会的性質が、その人物の同一性そのものの基準となるものでないことは言うまでもない。

では、未来についてはどうだろうか。私が継続的に存在し続けることは確かなことではないだろうか。私は毎晩眠りに就くが、目覚めるのはいつもきまってこの私である。これからもずっとそうであるに違いない。眠っている間に私が消えてしまって、翌朝になったら別の人がこの体に目覚めていたり、あるいは、日中活動している間に、私が徐々に消えて行ってしまって、いつの間にか別人になっている、などということはありえないことである。以上のように考える人がいるならば、その人はジェイムズ的な立場に舞い戻ったことになる。この意識は、枝分かれしたり、混線したりなどせずに流れ続け、眠りによって中断した後も、必ず道を間違えずに正しい相手と接続する、と考えることとそれは同じことだからである。

大脳の右半球と左半球を分離して移植する場合や、脳を含めた人体がアメーバーのように分裂して二つの人体が生じた場合に、分裂前の人格はどうなるのか、と問われることがよくある。そして、こうした分裂(fission)の思考実験が、自己を単体とみなす単体理論(simple view)の有力な論拠となっている⁴。自分がこれから分裂するとすれば、これから自分はどうなるのだろうか、とだれでもが思うことだろう。分裂手術が成功裏に終わると確信しているならば、さらに、自分はどちらの脳で、あるいはどちらの身体で目覚めるのだろうか、と考え込むかもしれない。そう考え込んだ人は単体理論を信じている

のである。私の行き先を決めるものがあるとするれば、それは単体としての心的実体の行き先であるよりほかはないと思われるからである。私が、左脳が移植された身体で目覚めたならば、心的実体は左脳と行動を共にしたのである。

しかし、分裂のケースにおいて、私がどちらかで目覚めるという言い方は正しい言い方ではないように思われる。分裂において、自己がどちらかの人間を選ぶわけでも、分裂前の意識がどちらかの意識と接続するわけでもない。自分は分裂する前と同じ人間であると信じる主体が二つ生じるだけである⁵。日常的な睡眠と覚醒の場合も同じである。この私が明日の朝この身体で目覚めるとは、明日の朝この身体で目覚める人物が、自分はT.Hであると信じるだろうということである。また、通常は、この身体が存在し続ける限り、その身体に属する人物は、自分をT.Hであると信じ続けることだろう。だからといって、そうした信念を持ち続けることができるためには同一の実体が存続し続けなければならないわけではない。異なった実体に同じ種類の信念が宿ることは考えられることである。また、そうした信念の存在が自己の同一性の根拠となるわけでもないだろう。

意識を実体化する誘惑を振りはらってしまえば、単体理論の説得力は大幅に減殺されることだろう。結局のところ、単体理論は、同一の意識の流れという暗黙の前提をロック主義や新ロック主義と共有しているのである。自己が実体であるのは確かだとしても、自己が部分を持たない単体であることを示すような事実は、日常的な体験においても、また、仮想の体験においても、今のところ見いだされてはいないと言わなければならない。

自己が実体であるとするれば、それでは、それはどのような種類の実体なのだろうか。いくつかの可能性を検討してみることにしよう。

まず、自己はモナドであるかもしれない。モナドは部分を持たない単体である。自己が単体であることを示す証拠は見つかっていないかもしれないが、かといって、自己が複合体であるという証拠は見つかっているわけでもない。だから自己がモナドであることは可能なことである。自己がモナドならば、思考や、感情はもちろん、知覚や感覚もモナドの内在的な性質である。窓のないモナドは外界や身体から影響を被ることがないからである。私の知覚内容は刻々と変わり、性格も長い間には変化する。モナドの性質が変容したのである。私は、自分が今とは異なった知覚内容を持ち、異なった性格をし、異なった記憶を持っている様を想像することができる。私がモナドならば、自分の心的状態について想像可能であることは、実際に私に生じることが可能である。想像可能性と現実の可能性は重なり合う。

パーフィットは、ある人物の心的性質を徐々に他の人物の心的性質と入れ替えた場合、最初の人物が消え、別の人物が生じる臨界点のようなものがあるだろうかと問うている(Parfit, 1984, Chap. XI)。パーフィットはそのような点は存在しないと考えているが、自己がモナドならばそうではない。私であるところの T. H の心的性質が徐々にナポレオンの心的性質と取り換えられたとしても、私は存在し続ける。私は T. H からナポレオンになるのである。入れ替えが完了した暁には、自分が T. H であったという記憶も痕跡も何も残らないだろう。しかし、実際に生じているのは、同一のモナドの変容である。変容の最中の人物を、T. H と呼ぶのが適当か、あるいは、ナポレオンとみなすべきか、という問いに明確な答えを与えることができないボーダーライン・ケースが存在することは確かだろう。それは、粘土でできた坂本龍馬像を連続的にナポレオンの像に作り替える過程で、どこで

龍馬像からナポレオン像へ切り替わるのか、という問いに、明確な答えが与えられないのと同じことである。ただし、それと、どの時点で私が消えるかという問題は別である。モナドが存在し続ける限り私も消えずに存在するのである。

この世界がライプニッツ的であるならば、私は、それが心的な性質である限り、どのような性質でも身に纏うことができる。では、私は別のモナドであることもできたのだろうか。もちろん、それは不可能である。特定のモナドに何か加わることによってそれが私となるわけではないからである。それでは、私が誕生したときに、私は、実際に私が持っていた性質と異なった性質を持っていたということはあるだろうか。世界が今この瞬間に誕生したのだと仮定しよう。私も、他のモナドも、それぞれの記憶もろともこの瞬間に創造されたのである。私は今この瞬間に頭に鈍い痛みを感じているが、頭ではなく、胃に痛みを感じている私を創造することが神にはできただろうか。

ライプニッツの神は、宇宙の中のあらゆる視点から宇宙を眺め、良しとしたところに、その視点から宇宙を表出するモナドを創造した。神が、個々のモナドの観念を抱き、そのあとで、それぞれにどのような性質を纏わせるかを決めたのならば、それぞれのモナドが実際とは異なる性質とともに生まれることもできただろう。しかし、神はそのようなことをしなかった。そうする理由がなかったからである。というよりも、性質を身に纏う前の無差別の無数のモナドの観念を識別することは神にもできないからである。神は、ある性質を持つモナドを創造しようと欲し、そのようなモナドを創造しただけである。だから、今ここに、頭ではなく胃に痛みを感じているモナドが存在するとすれば、それは、神の観念の中においては、頭に痛みを感じているモナドとは別のモナドである。したがっ

て、今、世界が創造されたばかりだとすれば、私が、今、胃に痛みを感じていることは不可能なのである。ただし、生まれてしまったモノダの経歴はさまざまでありうる。神は、ライプニッツの考えとは違って、未来のことは考えない、気まぐれでその日暮らしの存在かもしれないからである。神は、一度創造したモノダを思うがままに変容することができるだろう。世界も私もこれまで存在し続けてきたのならば、私が、今、頭ではなく胃に痛みを感じていることもありえたのである。

この世界は、しかし、ライプニッツが考えたようなあり方をしてはいないのかもしれない。本当はライプニッツではなくデカルトが正しいのかもしれない。そうすると、私が単体であることに変わりはないものの、私の知覚や思考は、モノダにもともと潜在していた力が展開して行くことによって生じてきたのではなく、私であるところの心的実体が、特定の脳と結合することによって心的実体の中に生み出されたものということになるのだろう。私がライプニッツのモノダであるにしてもデカルトの心的実体であるにしても、私の変容可能性に関しては特段の違いはないことだろう。私が今結合しているところの脳は、これから様々な変容を遂げるかもしれないし、それに加えて、私であるところの心的実体は、何かの拍子に別の脳へと飛び移るかもしれないからである。問題は、私が別の脳のもとで生れ出ることが可能であったかどうか、ということである。私は、たとえば、スペイン人の両親から生まれることもできたのだろうか。私であるところの心的実体が、脳を渡り歩くことがありうるのだとすれば、それが実際とは別の脳と結合してこの世界に登場することもまたありえたのではないだろうか。

デカルトの神は世界を創造するときに何をしたのだろうか。デカルトの神は、世界に心ある

ものを住ませようと欲するならば、脳を備えた人体を創造するだけでなく、それぞれの脳に心を吹き込む必要があるだろう。そのとき、神は、どの脳にどの心を結合させようかと迷うのだろうか。心的状態が脳状態によって決まるのならば、神は迷う必要がないだろう。神は、特定の心的状態を持つ人間を創りたければ、それに応じた脳を創造し、その脳に心を吹き込むだけである。吹き込むべき心の観念が神の心の中に無数に存在し、その中から特定の観念を選んで吹き込むというようなことを神がしているわけではないだろう。モノダのときと同じように、いかなる差異もない無数の心的実体の観念を識別し、その中から特定のものを選ぶことは神にもできないだろうからである。神は一種類の心の観念をもとに、無数の個別的な心を現実世界へ生み出し続けるのである。私が日本人の両親から生まれたのならば、私がスペイン人の両親から生まれることはできなかったのである。すると、これもまたモノダのときと同じように、私の起源だけではなく、生まれたときの私の性質のすべてが、それが私であるためには必要であったことになる。神が現実の私と些細な点で異なる性質を持った人間を創造しようと欲したとすれば、そのために神が用いたであろう人間の観念は、神が私を創造したときの観念とは異なっていなければならないからである。

モノダにせよデカルトの実体にせよ、それらが個別性、すなわち私性を獲得するのは、それらが現実世界に出現した後のことである。だから、私の心は、私が生まれてしまった後はどのような変容も受け入れることができるが、私が別様に生れ出るとはありえなかったのである。私がある特定の性質を身に纏って生まれ出たのではなく、ある特定の性質を身に纏って生まれ出たものが私なのである⁶。

チザムは、この世界は物だけからなると主張

する唯物論が正しければ、自己は脳の中のどこかに存在する、部分を持たない微小な物質粒子と同一でなければならないと言う(Chisholm, 1998)。脳は異なった時刻には異なった部分からなる継起的存在(ens successivum)であるのに対して、自己はいかなるときにも同じものからなる非継起的存在(ens nonsuccessivum)でなければならない。日に日に私の脳細胞を構成する原子は入れ替わって行くにもかかわらず、同一の私が存続し続けているからである。したがって、私が何かの物質と同一であるならば、それは、脳の部分が入れ替わった後にも依然として脳内に存在し続ける、部分を持たない微小粒子である以外にはないのである。

チザムの微小粒子はデカルトの心的実体と同じ役割を果たしている。二つの違いは名称の違いでしかないと言ってよいだろう。ここで、デカルトの世界から心的実体を、チザムの世界から微小粒子を取り去ってみよう。後に残るのは正統派唯物論者の世界である。そこにあるのは、原子の離合集散だけである。そこでは、自己は複合体である。自己が実体であるならば、私と同一であるところの実体を構成する原子の多くは、10年前には宇宙の様々な場所に散在していたことだろう。また、10年後には再び宇宙空間に散逸してしまっているだろう。だから、私は今このときだけに存在する瞬間的存在か、あるいは、この瞬間以外は宇宙の様々なところに存在する離散的な存在か、どちらかでなければならないだろう。

以上の説のうち、どれがもっともありそうな話に思えるだろうか。それとも、どれもが荒唐無稽に見えるだろうか。チザムは、自己が微小な物質粒子であるという説が眉唾であると思う人は、よりもっともらしい説を考え出してみたいと思う。いずれにしても、自己というのが存在するとすれば、おそらく、それはとて

も奇怪なものなのである。

注

- 1 ロックは「人格(person)」と自己「(self)」を同じ意味で用いている。本稿もロックに倣うことにする。なお、person の訳語として「人格」を充てることは適切ではないかもしれないが、動物種としての「人(man)」と区別するために、やむを得ず慣例に従った。
- 2 ロックが生命の同一性と言うとき、何を意味しているのかは判然としない。ロックは、時計や船のような人工物も部分を失っても同一のままにとどまることができると考えているので、生命の同一性を広い意味での機能的同一性の一種と考えていたのかもしれない。ただし、機能的同一性が数的同一性の基準となりうるかどうかは疑問である。本稿では触れていないが、世界には単体と生命体だけが存在するという見解については van Inwagen (1990)を、また、単体と人格だけが存在するという見解については Merricks (2001)を参照されたい。
- 3 自己の単体理論としては、Chisholm (1976), Lowe (1996), Swinburne (1997), Barnett (2010), Hasker (2010)などを挙げることができるだろう。
- 4 たとえば、Chisholm (1976), Swinburne (1997)。
- 5 分裂について、詳しくは星野(2008)を参照されたい。その中では、非デカルト的二元論の可能性が検討されている。
- 6 心以外の存在物の個別性と通時的同一性については、星野(2010)を参照されたい。

文献表

- Barnett, D. (2010), "You are Simple", in Koons and Bealer.
- Chisholm, R. M. (1976), *Person and Object*, Open Court.
- Chisholm, R. M. (1998), "Which Physical Thing am I?" An Excerpt from "Is there a Mind-Body Problem?", in van Inwagen and Zimmerman.
- Dainton, B. (2005), "The Self and the Phenomenal", in Strawson.
- Hasker, W. (2010), "Persons and the Unity of Consciousness", in Koons and Bealer.
- 星野 徹(2008)、「遍在する心」『埼玉大学紀要 教養学部』第44巻第1号。

- 星野 徹(2010)、「同一性とこのものの性」『埼玉大学紀要 教養学部』第45巻第2号。
- James, W. (1950), *The Principles of Psychology*, Dover Publications.
- Koons, R. C. and Bealer, G. (eds.), (2010), *The Waning of Materialism*, Oxford University Press.
- Locke, J. (1975), *An Essay concerning Human Understanding*, ed. P. H. Nidditch, Clarendon Press.
(『人間知性論』、大槻春彦訳、岩波書店)
- Lowe, E. J. (1996), *Subjects of Experience*, Cambridge University Press.
- Merricks, T. (2001), *Objects and Persons*, Clarendon Press.
- Parfit, D. (1984), *Reasons and Persons*, Oxford University Press. (『理由と人格』、森村進訳、勁草書房)
- Strawson, G. (ed.) (2005), *The Self?*, Blackwell Publishing.
- Swinburne, R. (1997), *The Evolution of the Soul, Revised Edition*, Clarendon Press.
- van Inwagen, P. (1990), *Material Beings*, Cornell University Press.
- van Inwagen, P. and Zimmerman, D. W. (eds.), (1998), *Metaphysics: The Big Questions*, Blackwell Publishing.